【論　文】

G・H・シューベルトのロマン的世界像

鈴木　潔

（一）

ドイツ・ロマン主義に固有の世界像というものを想定し、それをいま復元しようとするならば、その試みに対して最も豊富な資料を提供するものは詩人たちの作品であることは当然として、一方同時代の自然科学者たちの抱懐していた、世界についての具体的なイメージを再現できれば、詩人の世界像の背景が明らかになりはしないだろうか。というのもロマン派の詩人たちは、たとえばノヴァーリスのように自ら自然の研究家であったり、あるいは少くとも自然研究に深い関心をもっていたからである。彼らは自然として存在するものすべて、この大宇宙、要するに森羅万象ことごとくを生命ある統一体とみなす自然観をもっていて、自然科学に対しては個々の現象の有機的連関の証明を期待したので、それゆえ天文学、地質学、生物学、医学、物理学、化学、数学、およそありとある自然科学の分野で彼らの関心を免れるものはなかったのである。

このような当時一般の関心と期待の昂まりの中で熱狂的に迎えられた自然研究家の一人がシューベルト（Gotthilf Heinrich Schubert 1780–1860）である。彼はとりわけ『自然科学の夜の側面についての見解』*Ansichten von der*

Nachtseite der Naturwissenschaft (1808) と『夢の象徴論』*Die Symbolik des Traumes* (1814) によってロマン派の詩人たちに測り知れぬ深い影響を及ぼした。[1] 本稿はこの二著についてシューベルトの世界像を素描することが目的であるが、まず最初にまだわれわれには馴染の薄いこの自然研究家の、右の二著を世に出すまでの前半生をたどってみよう。[2]

注 (1) A. Elschenbroich: *Romantische Sehnsucht und Kosmogonie* によれば多かれ少なかれシューベルトの影響を受けた詩人として、ロマン派では E. T. A. Hoffmann, H. v. Kleist, J. Kerner, F. G. Wetzel, L. Tieck, A. v. Arnim, C. Brentano, J. v. Eichendorff が、またロマン派以外では Goethe, Stifter, Lenau, Hebbel の名が挙げられている。ことにホフマンの受けた影響は決定的で E. Busch: *Die Stellung G. H. Schuberts in der dt. Naturmystik und in der Romantik* によれば E. Th. A. Hoffmann ist ohne Schubert nicht zu denken. Seine Dichtung kann eine künstlerische Interpretation zu Schuberts Philosophie genannt werden. (S.310) とすら言われている。

(2) シューベルトの生涯については彼の自伝 *Der Erwerb aus einem vergangenen und die Erwartungen von einem zukünftigen Leben.* 3 Bde. (1854-56) にあたらなくてはならないが、これは入手できなかったので、本稿の末尾に記した諸文献によりあたかもジグソー・パズルのように継ぎ接ぎ細工を余儀なくされた。以下の記述には不完全、不正確な部分もあることを予めお断りしておきたい。

(二)

シューベルトは一七八〇年、ザクセンのホーエンシュタイン (Hohenstein in Erzgebirge) で牧師の家に生まれた。ピエティスムスの規律と敬虔な雰囲気に包まれて、彼はつつましく平安な子供時代を送った。たださすがに幼時

より自然科学的探究心の芽生が見られ、鳥の骨や鉱物を収集したり、捕鯨について一冊の本をものにしようと企てたり、また特に物理学、天文学方面の関心が深かった。

一七九六年から Weimar のギムナジウムに学び、この頃ヴィーラント、ゲーテ、シラー、ヘルダー等の書物に接する。たまたまヘルダーの息子 Emil Herder と同級であった関係でシューベルトはよくその家庭に招かれたりして、著書によってのみならず、直接に偉大な思想家の教えを受ける僥幸に恵まれたのである。一七九九年ギムナジウム最高学年の二人の同級生に対して老ヘルダーは一週間の Hodegetische Abendvorträge を行うが、その第一夕、冒頭に語られたことは、

永遠の知恵はわれらに偉大な教科書を提出している。それによってわれらは休みなく学ばねばならない。この教科書は自然という名である。その個々の文字は個々の物象である。これを先ず初めに、正確に、あらゆる連関において知らねばならない……[3]

という教えであった。この言葉が若きシューベルトに与えた感銘の深さは、その後の彼の歩みが雄弁に物語っている。彼は師の指示した、自然という書物に学ぶ道をひたむきに進むのである。

牧師である父としてはもちろん息子を聖職者にするつもり、そのためシューベルトは一七九九年から Leipzig で神学を専攻する。しかし彼の自然科学の才能を惜しんだヘルダーの口添もあって、一年間の神学研究の後、彼は医学部に移った。ライプチヒの医学生時代で特記すべきは、同じ医学生であり、また同じように文学に傾倒していたヴェッツェル (F. G. Wetzel 1779–1819) を友人に得たことであろう。この『ボナヴェントゥーラの夜警』(*Nachtwachen des Bonaventura* 1804) の著者といわれる詩人とシューベルトとの交友は末永く続くものとなった。

一八〇一年、彼は多くの学友たちと医学研究を完成するため Halle に移動する。ここの大学では、精神病治療を学問として深く研究した初めての医学者といわれるライル（J. C. Reil 1759-1813）が教えていて、シューベルトは精神病の理論、動物磁気説などについて深い影響をうけた。

ところがある日、彼はある雑誌で Galvanismus の神経に及ぼす作用についての実験報告を続むや、直ちに Jena に向けて出発し、翌日学友たちと合流して、その著者リッター（J. W. Ritter 1776—1810）に面会した。さらにシェリングの話を聞くに及んで、彼らはこの大学に移る決意を固めたのである。

このように、シューベルトの思想に決定的な刻印を押すことになる自然哲学者との邂逅がなされたのである。シェリング（F. W. J. v. Schelling 1775-1854）はここイエナで一七九八年、二十三才にして哲学教授の職につきこの初期ロマン主義運動の中心都市で着々と自然哲学体系を築きつつあった。若い医学生が初めて、わずか五才違いの哲学者に接した一八〇一年、シェリングは二十六才、さらに五才年長のヘーゲル（G. F. W. Hegel 1770—1831）もイエナ大学講師であり、二人の哲学者はその頃共同で哲学雑誌を編集していた。当時はもちろんシェリングの方が羽振がよかったのであり、彼の絶大な人気については、後年シューベルトは自伝の中で次のように活写している。

当時イエナで、午後も遅くなってマルクト・プラッツを通りかかった者は、群れ集う学生たち、一日中で他のどの時間よりも数の多い群集に出くわしたものだった。同郷学生組合の祝宴とか、ある学部の学生集会とかをこのような雑踏の理由とすることはできなかった。というのは、そこには方々の土地の若者たちが集っていたし、神学生も法学生も医学生も、中にはまた大学での研究生活をとうの昔に終えたか、また学者という職業の人ではない、かなり年配の人たちもいた。

他所者は尋ねるより仕方がない。ここで何があるのですか、と。ほんの二、三日でもこの大学で過ごした者は誰でも知っている。今は、シェリングが彼の自然哲学を講義する時間である、と。[4]

シューベルトには講壇の若き哲学者の姿が「まるで聖別された眼にだけ開かれる彼岸世界の見者ダンテのように」[5]映じた。彼はこのとき震慴され心酔した師の自然哲学を生涯信奉し続けたのである。

一八〇三年学位を得る。結婚して Altenburg で医師としての経歴を踏み出し、ガルヴァニスムス、動物磁気の方法で患者の治療にあたるものの、生活は困窮し、一〇〇ターラーの負債ができたという位だから、シューベルトは医家としての腕はともかく、名声は遂に獲なかったものと思われる。しかし文学熱の方は募る一方で彼の読書範囲はティーク、シュレーゲルから、イタリア、スペイン等諸国の作家に及び、ラテン諸国の文学にかなり造詣を深めてこの方面では読書家というに留まらず、プロヴァンス語、ポルトガル語、スペイン語、による最古の文学作品の収集を行ないこれを出版している。[6] また同じ頃、困難な生計を潤すために、ティークの *Franz Sternbalds Wanderungen* やノヴァーリスの *Heinrich von Ofterdingen* などを下敷にした二巻の小説『教会と神々』*Die Kirche und die Götter* (1804) を書いた。

一八〇五年から翌年にかけてシューベルトは Freiberg の鉱山学校 (Freiberger Bergakademie) に赴いて、岩石水成説で有名なヴェルナー (A. G. Werner 1750–1817) のもとで研究する。この鉱山学校はかってバーダー (F. Baader 1765–1841) が、そしてまたノヴァーリスとシュテッフェンス (H. Steffens 1773–1845) が共に地質学を学んだことのある、ドイツ・ロマン主義にとって重要な意味をもつ学校である。彼らにとって鉱山は母なる自然のふところを覗かせる、限りない驚異の宝庫であった！

ヴェルナーについて学んだ地質学はシューベルトの自然観の形成にとって大きな収獲であった。この研究の成果は『自然科学の夜の側面についての見解』にももちろん生かされているが、また『地質学と鉱山学の手引』*Handbuch der Geognosie und Bergbaukunde* (1813) なる著作を生んでいる。

さてシューベルトの生涯の方向を決定づけ、また彼がドイツ・ロマン主義に重要な貢献を果たす契機となったのは彼の Dresden 滞在といえよう。ドレースデンもまたロマン主義運動の一つの拠点となった都市である。フランス軍の捕虜から解かれたばかりのクライスト (H. v. Kleist 1777-1811) が一八〇七年八月、この芸術都市の一員となる。そしてすでに一八〇五年以来、数回にわたる学問、文学についての講演によって名声を得、この都市の芸術家サークルの間に確とした勢力を張っていたアーダム・ミュラー (Adam Müller 1779-1829) と協力して、シラーの主宰する「ホーレンをしのぐ構想で」[7] 新しい芸術雑誌の出版に着手する。この雑誌『フェーブス』*Phöbus. Ein Journal für die Kunst. Herausgegeben von Heinrich v. Kleist und Adam H. Müller* (1808) の刊行には在ドレースデンの詩人、画家たちが多く参加したのだが、一八〇六年ドレースデンに移り来て、画家キューゲルゲン (Gerhard von Kügelgen 1772-1820) の家に滞在していたシューベルト、そして彼の医学生時代以来の友人で一八〇五年からこの都市に住んでいるヴェッツェルも重要な協力者だった。ミュラーはゲーテに宛てた手紙に言っている。「彼（クライスト）とシューベルト博士が私のプランの最も親密な協力者です」[8]

シューベルトは『フェーブス』第四・五合併号に一篇の、道具立てといい筋書きといい、いかにも当時の好尚に合った物語『シーラスのバイオリン弾きの冒険』*Die Abentheuer des Fiedlers zu Schiras* を寄せている。また彼はミュラーの勧めを受けて一八〇七年から翌年にかけての冬、十四回にわたって講演を行ったのだが、これが『自然科

学の夜の側面についての見解』として一八〇八年秋出版されたのである。

なおドレースデン時代に風景画家のフリードリヒ（C. D. Friedrich 1774-1840）を知ったこともシューベルトにとっては忘れ難い出来事であった。彼はこの画家のキャンバスに、自分自身の自然観の見事な形象化を見たのである。[9]

このように彼本来の志向に適った仕事の場が与えられ、精神的には充実したドレースデン時代も、定職のない生活は相変らず苦しかった。折しも Nürnberg に実科学校 Real-Institut が新設されることになり、シューベルトはシェリングの仲介を得て、一八〇九年三月この学校に Direktor として赴任する。神話学者のカンネ（J. A. Kanne 1773-1824）も同校の教職に就き、また、既に『精神現象学』を著して独自の道を歩み始めたヘーゲルも同じ時、当地のギムナジウム校長に就任した。この哲学者とシューベルトの交友は職務上の範囲に留らなかったという。

ヘルダー、シェリングとならんでシューベルトの自然観に深い刻印を残したサン・マルタン（Claude de Saint-Martin 1743-1803）の神秘思想との出会もニュルンベルク時代のことであった。当時神秘主義への傾倒を深めつつあったシューベルトは、このフランスの啓明結社を代表する思想家についてバーダーに教えられ、その著作に近づいたのである。彼はマルタン主義の入門書として『物の精神』*De L'esprit des choses*（1800）をドイツ語に翻訳する。これはバーダーの序文が付され一八一二年に出版された。[10]

一八一三年七月、シューベルトは、親友ヴェッツェルが、『フランケン・メルクール』*Fränkischer Merkur* の編集者となって腰を据えていた Bamberg を訪れた。一夕、このヴェッツェルの友人がシューベルトをガーデン・パーティに招待する。この招待主こそ葡萄酒商にして文学愛好家、ホフマン（E. T. A. Hoffmann 1776-1822）の酒

友にして、詩人の最初の作品集の出版者クンツ（C. F. Kunz 1785–1849）に他ならなかった。同じ場所で、バンベルクを去る前夜のホフマンがクンツに「涙ながらの別離」[11]を告げたのは、このわずか三箇月前、四月二十日のことであった。

音楽と美酒によって宴も盛りとなったときクンツは客に、設立したばかりの自分の出版事業のため本を一冊書いて戴けないか、ともちかける。シューベルトは冗談半分、どんな本を書きましょうか、夢判断の本でも？と言うと「それはいい、あなたの筆による夢判断の本をください、喜んで出版させて頂きます」とクンツが答えた。こうして『夢の象徴論』が翌年クンツによって出版されたのである。

注（3）J. G. Herder: *Sämtliche Werke.* Bd. XXX. S. 509. *Hodegetische Abendvorträge an die Primaner Emil Herder und Gotthilf Heinrich Schubert.* (1799)

（4）*Deutsche Literatur in Entwicklungsreihen. Reihe Romantik.* Band I. S. 150.

（5）*Ebenda* S. 151

（6）*Biblioteca castellana, portuguesa y proenzal por D. G. Enrique Schubert,* Altenburg 1804 (1), 1805 (2).

（7）Kleist an Cotta, 21. Dez. 1807.

（8）A. Müller an Goethe, 17. Dez. 1807.

（9）このロマン派を代表する画家の作品について E. Busch は前掲書（注(1)参照）で次のように述べている。
Seine Gemälde kann man als Illustration zu Schuberts Gedankenwelt verstehen. (S. 317)

（10）*Vom Geist und vom Wesen der Dinge, oder philosophische Blicke auf die Natur der Dinge und den Zweck ihres Daseyns, wobei der Mensch überall als die Lösung des Räthsels betrachtet wird. Aus dem Französischen des Herrn von St. Martin übersetzt von Dr. G. G. (!) Schubert,* 2 Teile, Leipzig 1812.

(11) E. T. A. Hoffmann: *Tagebücher*. S.200.

(三)

「世界は生きた統一である、これがロマン的世界観の根底であり、その唱導者たちが倦むことなく繰返す命題である」[12]とリカルダ・フーフは述べているが、このいわば有機的宇宙観はシューベルトにとっても彼の思想的営為の出発点であり収斂点であり、むしろ彼の揺るぎなき信念であった。

『自然科学の夜の側面についての見解』（以下『見解』と略す）なる書は、世界の生成、太陽系の構造、無機界、有機界、植物・動物界から哺乳動物類、人類と巡ってゆく壮大なスケールで、結局一つの有機体としての世界、ことに人間と自然の「本来の関係」について証明せんとする試みである。その際「これまでしばしば無視されてきた自然科学の夜の側面を他の一般に是認された対象に劣らず真摯に観察し、いわゆる奇跡信仰の領域に数えられてきた対象の種々をとり扱うことになる」[13]と述べ、合理的説明のつく事実――昼の側面――のみが自然の真の姿を明らかにするものではないとする姿勢を打ち出した上で、彼が触れんとする対象を次のように要約している。

人間と自然との最も古い関係、個と全体との生き生きした調和、現在の存在と未来のより高い存在との関連、そして新しい未来の生の萌芽が現在の生の真只中においてどのように育ちつつあるか、ということがそれ故この私の研究の主たる対象となるでしょう。[14]

このことばは『見解』の内容を簡潔に要約すると同時に、実はシューベルトの世界観を言い尽くしてしまっている。

が、とりあえず彼が人間について考えるとき、自然との関係というパースペクティブにおいてのみとりあげられること、それ以外の視点は皆無であることを今ここで指摘しておきたい。

いにしえ、人類の無垢なる幼年時代、人間は「自然との聖なる調和のうちに」[15]自足して生きていた。それは人間の精神が自然を把握するのではなく、逆に自然がその愛し子の精神を把んでいた時代であった。ところが次第に人間の心情の内に「神的な萌芽」[16]が育ってきて、人間はついに母なる自然のふところを去り、自然を生み、自然から人間を生んだ「父を、そしてより神的な理想を」[17]追ってゆく。母なる自然は悲嘆にくれつつ「人間の精神が彼女の腕を逃れて別の掟、この大地とは別の故郷を自ら探す」[18]のをみる。このときには「人間はもはや自然を理解しない」[19]のである。

従って彼によれば「人間と自然とのいにしえの紐帯」[20]を失ない、未来のより高い世界、個と全体が再び生き生きとした調和を回復する世界、すなわち神の理想を憧れ求めて生きているのが現在の人間の姿なのである。

ここに、あのロマン派の三段階史観――過去の黄金時代と未来の理想世界の間にある過度期としての現代――を、やはりシューベルトも共有していることは明らかだが、彼はこの中間としての現代の内に潜んでいる「未来の生の萌芽」の存在を主張し、それを具体的に証明しようとする。これこそ『見解』のライト・モチーフでありシューベルトの世界観の核心なのである。

この証明がどのようになされるのか見てゆこう。『見解』において自然は、宇宙の創造から、無機界、有機界へと歴史的に発展するものとしてとらえられている。より低い段階とより高い段階との間に断絶はなく、むしろある金属は形状と化学的性質において有機物と近縁である、[21]とかまたある種の植物、たとえば「おじぎ草」Mimose は感覚を有っている点で動物界に近い[22]とか、各発展段階の内に、次の段階の萌芽が潜んでいるというあり方で連続している

と考えられる。そしてこの連続した発展の段階を貫いて流れている「普遍的生命」das allgemeine Leben が存在する。

「普遍的生命は無機界の辺境で物質の深みから〔……〕まるで深い眠りから覚めるように目覚めて、それから人間存在に至るまでには漸進的な上昇と多種多様な経過が必要であること」[23]は確かだと述べて、彼は自然の多様性、各段階の存在意義を根拠づけている。

連続した自然発展の中で最高の存在はもちろん人間である。人間は自然の階梯を登りつめた最高段、未来のより高い世界に接する位置にある存在である。自然の連続性はこの段階でも貫かれている故、当然「人間は、地上の自然の最高峰に位置すると同時に、地上を越える自然の最初の萌芽でもある」[24]という二重性の中に身を置いている。

人間が、地上の自然の一発展段階ではなく、その最後段階で、直接より高い世界に接していることは、次のように説明される。「一般的に、より高い未来の存在の、あの現在に境を接する心的世界の精神は、人間存在において宗教として、あるいは芸術にしろ知的なものにしろ熱狂として発現していると思える。人間のこの最高の、もっとも心的な所有物はこの地上に全く固有のものとは思えない。」[25]

では一体、この萌芽は現在のわれわれの内にあってどのように育っているのであろうか。それは「現在の生の受動的状態において特に現れることが多い。そして不可思議な、およそ思いも及ばぬ底深いわれわれの本性は、たいてい没我の瞬間、あるいは現在の意志が眠り込んだ瞬間に姿を垣間見せるのである。」[26]従って『見解』の大詰めは「動物磁気とそれに関連する若干の現象について」[27]論じることになる。なぜなら催眠状態こそ人間の日常的活動の停止した状態、典型的な「受動的状態」に他ならないからである。

メスマー（F. A. Mesmer 1734-1814）が創始した「動物磁気」による治療法は、周知のように十八世紀末のヨーロッパ社会に数知れぬスキャンダルを提供したけれども、今日では現在の精神療法の先駆として評価されている。しばらくツヴァイクの『精神による治療』[28]に依って、後に彼の名をとって「メスメリスムス」Mesmerismus と呼ばれる治療法を創始した医師について述べてみよう。

磁石を用いて病を治す方法は古くから行われていたのだが、メスマーがたまたまその方法による治療の現場に立会ったこと、それを自分の患者にも試みて、その幾人かには予想外の効果が挙がったことが彼の磁気説を生む契機となった。ここで鉄の磁石が人体に何らかの力を及ぼす、と彼が信じるに至ったのには理由があるのである。メスマーが一七六六年に学位を得た論文は『惑星の影響について』*De Planetarum Influxu* 論じたもので、その中で彼は「中世の占星術の影響のもとに、星の人間に及ぼす影響を仮定し、ある神祕な力が『天の広大な空間を通してあらゆる物質の内奥に作用していること、原エーテル、つまり神祕な流体が全宇宙を、よってまた人間をも貫流していること』というテーゼをたてた」[29]のである。それから十年、彼は自分が眼にしている磁石による不思議な現象の原因を、かって仮定したウル・エーテルと結びつけずにはいられなかった。

今日われわれは、メスマーが治療に成功を収めたのは、磁力の働きではなく、暗示による催眠療法に過ぎなかったことを知っている。彼もやがて鉄の磁石が治療に効能があるわけではないと気付いたのだが、それでも磁力と同種の不思議な力が人体にもあるに違いないと信じ続けた。よって初期の精神療法は奇妙な「動物磁気説」tierischer Magnetismus となってヨーロッパに流布されていったのである。

シューベルトは医者として、磁気療法を深く研究し、また実際に用いもした。彼は『見解』において、この新療法

をめぐる喧騒は動物磁気説の本質と無縁の出来事であると力説している。彼が磁気療法を重視する理由は、治療効果とは別に、催眠状態は透視（Hellsehen）、予知（Vorhersagung）、共感（Sympathie）など「通常の人間の諸力の限界を踏み越える」[30]状態を生みだすからである。催眠は現在の人間に未来の世界を開示するもの、と彼は確信している。

注（12）R. Huch: *Die Romantik.* S. 397.
（13）*Ansichten* S. 2.
（14）*Ansichten* S. 3.
（15）*Ansichten* S. 4.
（16）*Ansichten* S. 8.
（17）*Ansichten* S. 9.
（18）*Ansichten* S. 9.
（19）*Ansichten* S. 9.
（20）*Ansichten* S. 5.
（21）*Ansichten* S. 200f.
（22）*Ansichten* S. 245f.
（23）*Ansichten* S. 301.
（24）*Ansichten* S. 309.
（25）*Ansichten* S. 320.
（26）*Ansichten* S. 322.
（27）Dreyzehnte Vorlesung. Von dem thierischen Magnetismus und einigen ihm verwandten Erscheinungen. (S 326ff.)

(28) S. Zweig: *Die Heilung durch den Geist. Mesmer, Mary Baker-Eddy, Freud.*
(29) *Ebenda* S. 38.
(30) *Ansichten* S. 334.

（四）

さて、動物磁気など「未来の生の萌芽」についてのシューベルトの見解をたちいって検討する前に、われわれはひとまず『見解』を去って『夢の象徴論』（以下『象徴論』と略す）に目を移すのが好都合と思われる。なぜなら、その序文において、この書の目的は夢の専門的な理論を呈示することではなく、日常正当に顧みられることのない人間性の「恥部」partie honteuse に注意を喚起することにあると述べられているように、前者が自然科学の「夜の側面」を追究したものとすれば、『象徴論』は夢を手がかりに、ひたすら人間の「夜の側面」を論じてゆくものだからである。

その第一章は『夢の言語』Die Sprache des Traumes と題され、冒頭すでに『象徴学』を貫くライト・モチーフが呈示される。「夢の中では、あるいは入眠に先だってよく現れるデリーリウムの状態のときすでに、魂は平常とは全く別の言語を話すようにみえる」[31] いまライト・モチーフと言ったのは、ここでさりげなくもちだされた夢の言語という概念が次第に明白にされてこの書の核となるからである。シューベルトは通常の言語が Wortsprache であるのに対して夢の言語は Bildersprache であるという。この「絵ことば」は、生後学習によって身につける語によることばとは異って、生得のものであり、しかもそれとは比較にならない、無限の表現力を備えている。

ところが夢の言語は、予言者の啓示のことば Sprache der Offenbarung また詩のことば Sprache der Poesie とも近縁関係にあって、これら形象による言語の「原型はわれわれをとりまく自然の内に」[32]あるとされる。またもや自然である！『象徴論』もやはり彼の自然観を別様に展開した著作に他ならない。ここでは、自然は「具体化された夢の世界」[33]あるいは「生命ある象形文字による予言的言語」[34]とされ、すなわち「神の人間に宛てた啓示」[35]以外の何物でもないといわれる。それは「より高い霊の世界で昔語られていた、そして今も語られているその言語」[36]であり、「生命を文字とする書物」[37]である。この自然言語説の究極の表現は Naturbibel[38]という一語に結晶している。自然は一巻の聖書とみなされているのである。

人間は元来自然の言語を完全に理解していた、というより「自然の言語と同じことばを人間の精神は語っていた」[39]のだが「あの大言語混乱以来」[40]われわれは自然の、その言語の深い意味を理解できなくなった、とされる。その結果、「人間の原初のことば」[41]は今や夢、詩、啓示として残るのみである。

ここまできて『象徴論』の構想はおよそ明らかになったと思う。シューベルトの自然観は六年前の『見解』から少しも変っていないが、ここで問題となるのは、自然観と言語観の独特の融合であろう。『象徴論』に見られる放恣とさえ思える言語概念の拡張、濫用は前著『見解』では全く窺うことのできなかったものである。この背景には、ヘルダーの教えが根本にあるとはいえ、『見解』を著して以後彼が傾倒し、その『物の精神』を翻訳もしたサン・マルタンの思想が投影していると考えられる。

そこで、H・フリードリヒの『十八世紀のフランス啓明結社の、特にサン・マルタンの言語理論』[42]に拠って、『象徴論』の背景を探ってみよう。

「啓明結社の父」パスカリ（Martinez de Pasqually 1715?-1774）はその主著『復興について』*Traité de la réintegration*（1770）において「世界と人間の創造史を取扱い、神との再合体への道を示している。[43]」すなわち「喪失と回復」déchéance et réhabilitation が彼の人間史の根本図式であるが、これを継承したサン・マルタンは「世界の二重性――神からの離落と再合体への意志――という啓明結社の思想を言語の観方に転用する。[44]」従って「言語史は〔……〕サン・マルタンにあっては喪失と回復という神の創造史の反復にすぎない[45]」のである。つまり彼によれば、かっての神と人間精神の統一を啓示する langage は今や失われたのだが、その残照は堕落言語たる langues の内に仄かに光っている。言語は、よし堕落したものでも、人間の恣意的な産物ではなく、原初の神と人間の一体を示すシンボルである。それ故、人間が再び神と一体となるには、原言語である langage を取戻さねばならない。「もしわれわれが原言語を再び手にすれば、世界の秘密はことごとく解明されるであろう[46]」という点にマルタン主義の核心がある。

もはやサン・マルタンの神秘主義が『象徴論』の構想に対して、いかほど多くを提供しているかは明白であろう。

注（31）*Symbolik* S. 1.
（32）*Symbolik* S. 24.
（33）*Symbolik* S. 24.
（34）*Symbolik* S. 24.
（35）*Symbolik* S. 29.
（36）*Symbolik* S. 46.

(37) *Symbolik* S. 46.
(38) *Symbolik* S. 51.
(39) *Symbolik* S. 55.
(40) *Symbolik* S. 55.
(41) *Symbolik* S. 85.
(42) H. Friedrich : *Die Sprachtheorie der französischen Illuminaten des 18. Jahrhunderts, insbesondere Saint-Martins.*
(43) *Ebenda* S. 296f.
(44) *Ebenda* S. 298.
(45) *Ebenda* S. 300.
(46) *Ebenda* S. 300.

（五）

シューベルトの世界像の輪郭はすでに明らかになったと思う。それは、一草一木に生命を感じる自然感情、ものみなすべてに神の意志を見る神祕主義に彩られていて、それを彼独自の世界像とみなすことのできないことも明白だと思われる。むしろ十八世紀から十九世紀にかけての詩人、哲学者の心のキャンバスに描かれた世界のイメージを、最もよく代表する例と考えられよう。しかしながら彼が「自然の夜の側面」「人間性の恥部」に焦点を絞って、夢、夢遊病、催眠、狂気を考察するとき、いいかえれば医者シューベルトが姿を覗かせるとき、彼の世界像は独自の色彩を帯びて個性を主張しはじめるのである。

われわれは以下彼が最も力をこめて説く対象、一時的にせよ人間に未来の世界を開示する動物磁気、催眠術について『見解』と『象徴論』の論証を追ってゆこう。

催眠状態は施術者が患者の頭部から下肢へ、あるいはその逆に撫でさすったり、あるいはただ息を吹きかけたりまた単に手、指に解れるだけでも惹き起こされるという。[47]「最初は通常の眠り、特に何かで緊張した後の眠りと同じような様子をみせて始まる。四肢はダランとし、まぶたはもう開いていることができない。ついには深い息を一つついて眼は閉じてしまう。最初に現れる無感情、無意識の状態は通常の眠りに非常に似ている。そのまま時には何分か、時には何時間も続く。この間患者に物を尋ねても、自然に眠っている者に尋ねるのと同じで反応はない。しかしこの中間状態のまま多かれ少なかれある時間が経って、再び先より深い呼吸が見られるや、突然表情がいつになく明るくなり、その様子がどれをとってもある高い精神的緊張を垣間見せるとき、たいがい本来の催眠に入ったのである。このとき患者は何を尋ねられても、それまで見られなかった精神の明瞭さと活動性を示して答える。患者自らが、その状態をかって体験したことのない至福の状態だと告げる……[48]」

こうして不可思議の世界の扉は開かれる。催眠状態においては「すべての感覚が覚醒時には見られなかった鋭どさをもつ」[49]のだが、さらに超常的な感覚が発生する。まず、外界を「眼で見ることなく認知する」[50]例が挙げられる。ある少女は催眠中、眼を閉じたままで手仕事をしたり、物を書いたり、外を出歩いたりするのである。

次には「自分自身の身体の内部を見る」[51]能力が生じることさらに「あらゆる肉体上の変化の予知」[52]即ち、患者自らが、今日は頭痛がないだろう、とか自分の失神する時を分の単位まで正確に告げるという例が挙げられる。だが最も注目すべきは、患者と施術者、また患者に親しい者との「深い共感」tiefe Sympathie[53]であると言われる。それは

例えば催眠中、患者の姉が腕を針で刺すと、患者の方も同じ箇所に痛みを訴える、という現象をさすのである。

右の、透視・予知・共感などの超常現象を発現させる理由を『見解』では催眠と死の共通性から説明している。それによると病気とは、人間の内的調和の乱れた状態に他ならず、磁気療法は一時的な調和の回復をもたらすとしても、完全な回復は死によってのみ成就される。催眠術は「死が大規模に完全な方法で行うことの、小規模なものである。[54]」そして催眠と死において主役を演じるものこそ燐 Phosphor に他ならない。死が肉体と燐の分離であるように催眠中の、身体内を視ること、眼を閉じて外界を視ること、「その他すべての透視現象は、あの玄妙な燃える存在の遊離によってなされる[55]」のである。

『象徴論』では同じ問題が別の根拠から説明される。すなわちシューベルトは、ここではより一層医学者としての本領を発揮して、人間の神経組織によってすべての超常現象を解明せんと試みている。彼は人間の神経組織の働きとその意義の叙述に『象徴論』の三分の一の頁を割いているのである。[56]

さて、人間の神経は二つの系統に大別されている。第一は脳神経 Gehirnnerven と脊髄神経 Rückenmarksnerven からなる脳神経系 Cerebralsystem 第二は神経節 Ganglien と網状組織 Geflecht を豊富に含む交感神経系 sympatische System od. Gangliensystem である。後者はすべての内臓や血管の神経の総体で、脳の意志に従うことなく自立して活動している。発声・発話を司どる Stimmnerven も交感系の一つに数えられている。

両神経系は通常直接に影響を及ぼし合うことなく、互いに孤立している。しかし場合によってはこの孤立が解消し、両神経系が一体となって活動するときがある。これが即ち夢、催眠、夢遊病、狂気の状態に他ならない。例えば磁気療法を受ける患者は催眠中眼を閉じたまま外界を視ることができるが、これは多くの患者の一致した意見による

とみずおち付近に視覚が生じるためである。従って催眠中物をはっきり視ようとするとき「普段は眼に近づけるところを、内なる本能に従ってこの場所（みずおち）に近づける」[57]のである。「催眠中はあの孤立が解消し、平常の思考の中心――脳――は交感神経系と一体となり、この神経系の行う精神活動に関与する。」[58]この時魂は平常の能力に加うるに「もう一つの奥深い、現在の状態では殆んど失われている感覚を使用する能力」[59]をもつ。その結果透視、予知共感などの不思議な現象が可能となるのである。

いま、自然との調和を失った人間の状態はその身体においても二神経系の分離、孤立となって鮮かに表現されている。それでは、あのいにしえの調和は、現在わずかに夢や催眠によって姿を覗かせる、より高い世界はいつ現実のものとなるのであろうか。シューベルトはそれを Cerebralsystem と Gangliensystem の関係から考える。「両体系間の孤立は自己意識の文化によってある限界まで増進するが、しかしその限界の彼方では孤立は完全に解消する。」[60]

注 (47) *Symbolik* S. 131.
(48) *Ansichten* S. 332f.
(49) *Ansichten* S. 335.
(50) *Ansichten* S. 338.
(51) *Ansichten* S. 339.
(52) *Ansichten* S. 340.
(53) *Ansichten* S. 344f.
(54) *Ansichten* S. 357.
(55) *Ansichten* S. 359.

(56) 『象徴論』の第六章『エコー』(S. 99–164) は殆んど神経組織の記述にあてられている。その際シューベルトは、主にこの時代の医師 J.C.Reil の論文に準拠して論じている。

(57) *Symbolik* S. 105.

(58) *Symbolik* S. 106.

(59) *Symbolik* S. 107.

(60) *Symbolik* S. 163.

Text u. Literatur

Gotthilf Heinrich Schubert: Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft, Dresden 1808. Reprograph. Nachdruck der I. Aufl.: Darmstadt 1967.

Ders.: Die Symbolik des Traumes, Bamberg 1814. Faksimiledruck nach d. I. Ausg. Mit e. Nachwort v. G. Sander, Heidelberg 1968.

Deutsche Literatur in Entwicklungsreihen. Reihe : Romantik, Bd. I: "Charakteristiken. Die Romantiker in Selbstzeugnissen und Äußerungen ihrer Zeitgenossen" Bearb. v. P.Kluckhohn, Stuttgart 1950; Reprogr. Nachdruck Darmstadt 1964.

Johann Gottfried Herder : Sämtliche Werke. Hrsg. v. B. Suphan, Bd. XXX.(1889). Reprogr. Nachdruck Hildesheim 1968.

Phöbus. Ein Journal für die Kunst. Hrsg. v. H. v. Kleist u. A. H. Müller, Dresden 1808. Photomechanischer Nachdruck Stuttgart 1961.

Ricarda Huch : Die Romantik, 1899(I), 1902(II). Neue Aufl. Tübingen 1964.

Stefan Zweig : Die Heilung durch den Geist. Mesmer, Mary Baker-Eddy, Freud. Leipzig 1931. Neue Aufl. Frankfurt/M 1966.

E. T. A. Hoffmann : Tagebücher, Darmstadt 1971.

Ernst Busch : Die Stellung Gotthilf Heinrich Schuberts in der deutschen Naturmystik und in der Romantik , in : DVjs.

20(1942), S. 305-339.

Hugo Friedrich : Die Sprachtheorie der französischen Illuminaten des 18. Jahrhunderts, insbesondere Saint-Martins, in:DVjs. 13(1935), S. 293-310.

Adalbert Elschenbroich : Romantische Sehnsucht und Kosmogonie. Eine Studie zu Gotthilf Heinrich Schuberts "Geschichte der Seele" und deren Stellung in der deutschen Spätromantik, Tübingen 1971.